

児童養護施設に入所している思春期女子の心身の変化の特徴

柚 山 香世子（城西国際大学看護学部看護学科）

本研究の目的は、児童養護施設に入所している思春期女子の心身の変化に対する認識とその変化に対する疑問への対処、及び関連する要因を明らかにすることである。児童養護施設に入所している12歳から15歳（小学6年生から中学3年生）の思春期女子10名を対象に半構造化面接を実施し、質的帰納的分析により以下の結論を得た。

1. 児童養護施設に入所している思春期女子の心身の変化に対する認識とその変化に対する疑問への対処の特徴は、二次性徴、月経周期、被虐待体験からの情緒の不安定さ、大人になることへの不安と抵抗があること、人との付き合いの難しさ（大人への関わり、友人関係、異性関係）をもつ一方で、環境を受け入れる力も持ち合わせていた。

2. 児童養護施設に入所している思春期女子への支援として、子どもの心身の変化への科学的な知識や対応する技術を持つ看護職は、学校の養護教諭だけでなく、施設の中にも必ず存在し、施設職員と連携し、前述した子どもの特徴に配慮した性（生）に関する支援を行う必要があると考える。

KEY WORDS : Home for Children, Adolescent girls, lifestyle and sex education, Child Abuse

I. はじめに

児童養護施設（以下、施設とする）は、保護者のない児童（18歳未満：児童福祉法）や保護者に監護させることが適当でない児童に対し、安定した生活環境を整えるとともに、生活指導、学習指導、家庭環境の調整等を行いつつ養育を行い、児童の心身の健やかな成長とその自立を支援する機能をもつ¹⁾。施設に入所している子どもの背景は、養育者である両親の精神的障害の罹患による養育困難や行方不明、虐待など理由は様々である。近年では、施設に入所している子どもの半数以上が虐待を受け（平成25年、59.5%）、発達に何らかの障害を抱える子どもが増加している（平成25年、28.5%）ことが報告されている¹⁾。

施設退所後の子どもの行き先は、家庭復帰、他の施設等へ移るといった措置変更、一人暮らしを始める社会的自立の3種類が主である²⁾。現在、施設に入所する子どもの95.2%が高校に進学している¹⁾ため、児童福祉法で定められた18歳未満を超える時期、つまり高校卒業と同時に退所するケースが殆どである（但し、措置延長が必要と判断される場合には20歳未満までは延長できる）。親を頼ることのできない子どもの場合は、高校時代からアルバイトで資金をため、施設退所後、奨学金などを受けながら大学、専門学校等に進学する。もしくは、就職

して自立した生活を求められる現状がある。退所後の生活では、子ども自身で経済面だけでなく様々な課題に取り組まなければならないが、高校を卒業したばかりの子どもには初めて経験することが多く、困難が予測される。

施設入所中・退所後の子どもに生じる様々な問題のなかで、性に関する問題は少なくない。先行研究では、施設に入所した子ども909名（男子484名、女子425名）を対象に、入所・退所時の問題行動について調査している。入所時に問題ありと判断された男子は（入所：平均年齢10.2歳、退所：平均年齢13.4歳）、「盗み」、「火遊び」、「人にお金をせびる」等があり、女子（入所：平均年齢10.6歳、退所：平均年齢13.4歳）は、「不良交友」、「性的非行」等が有意に多い結果である。保護者の問題との関連は、問題ありと判断された男子の親は、問題ないと判断された男子と比較し、身体的虐待、放任等怠惰、アルコール依存等の問題を有しており、女子は、就労、心理的虐待、放任等怠惰などの問題を保護者が有することが報告されている³⁾。このことから、施設に入所している問題ありとされる子どもの殆どが何らかの虐待を受けている可能性があり、女子は男子に比べ、性非行や性犯罪に巻き込まれる危険性の高いことが示唆される。

他の研究でも、子どもの行動チェックリスト調査表（CBCL/4-18）を用いたアセスメント研究をもとに、施設の子どもの情緒・行動問題の実態とそれに対応するケアの方針が検討されている。結果として、年齢発達の見た子どもの問題行動の変化は、小学校の低学年から注

意の問題が現れ、思春期になると不安／抑うつ、攻撃の問題に移行して、情緒・行動上の問題が目立つ傾向が示されている⁴⁾。

さらに、虐待を受けて育った背景をもつ子どもは、自分自身を著しく低く評価する傾向があると言われる^{5)~8)}。加えて思春期にある児は、身体的にも精神的にも大きな変化を遂げる時期であり、それに伴い動揺と不安を抱えやすい^{5), 9)~11)}。

以上の背景から、男女ともに保護者から何らかの虐待をうけた背景をもつ子どもは、思春期になると不安や抑うつ、攻撃などの情緒・行動上の問題が見られやすい。特に女子に関しては性的な問題を抱える傾向が強く、性に関する様々な危機に直面しやすいと考えられる。退所後の行き先等を考慮すると、退所前に性に関する何らかの支援が必要と考えられ、入所している思春期女子の心身の変化に対する認識やその変化に対する疑問への対処、および関連する要因を明らかにすることは、その支援を考えるうえで必要な資料となると考える。

II. 研究目的

児童養護施設に入所している思春期女子の心身の変化に対する認識とその変化に対する疑問への対処、及び関連する要因を明らかにする。

III. 用語の定義

本研究では、以下のように用語を定義する。

【子どもの心身の変化】

思春期の月経を含む、主に二次性徴に関わる身体と心の変化

【心身の変化に対する認識】

心身の変化を捉え、疑問に感じたり、理解すること

【心身の変化に対する疑問への対処】

心身の変化に対する事柄・状況に合わせて、本人なりに疑問や困難に対し行うこと

IV. 研究方法

1. 研究対象者

A 児童養護施設に入所している12歳から15歳（小学6年生から中学3年生）の思春期女子10名。子どもと施設長双方の同意が得られた場合のみを対象とし、小学校4年生（10歳）程度の読み書き、人の話を聞く、話すなどのコミュニケーションが取れる子どもとした。性虐待の影響による精神的な症状が顕著であり、現在、特別な治療を受けている子どもは対象から除外した。

2. 調査方法

1) 半構造化面接

児童養護施設に入所する思春期女子に対し、面接ガイドに基づき30～40分程度の面接を行った。対象者の同意が得られた場合のみICレコーダーに録音した。思春期の子どもは、日中は小・中学校に通う。特に中学生は放課後の遅い時間まで部活を行うため、子どもの都合に合わせて面接日程を組んだ。

面接内容は、初経の有無と迎えた時の年齢、認識、疑問、対処、月経の周期、記録、随伴症状（痛み、イライラ感など）と対処、性に関する情報の得方、友人の有無と関係（施設／学校）、異性への意識と態度（施設／学校）、頑張っていること（施設／学校）、性や成長に関して知りたい内容とした。子どもの年齢・家族構成と関係・入所理由と時期、これまでの経過、発達障害の診断の有無や認知レベルの程度（読み書き、言語的コミュニケーション）、施設の行事への参加状況、学校の登校状況と問題、他者との関係、身体的な変化（初経の有無、身長の伸び）等の子どもの成長に関する情報は、施設職員の記録の一部を子どもや施設長の同意を得て収集した。

3. 分析方法

分析は、質的帰納的方法により行った。各ケースから得られた面接内容の逐語録を作成し、意味のある一文で区切り、質問内容ごとに意味内容を損なわない簡潔な一文を作成し、具体的内容とした。得られた「具体的内容」を類似性に基づき整理し、抽象度を高めて〈サブカテゴリー〉を抽出した。さらに、〈サブカテゴリー〉を類似した項目ごとに整理し、抽象度を高め《カテゴリー》で表した。

分析過程では、小児看護学の研究者2名のスーパーバイズを受け、分析結果の妥当性を確保した。調査期間は、2012年4月～2012年9月であった。

4. 研究への承諾及び倫理的配慮

研究の開始にあたり、千葉大学大学院看護学研究科の倫理審査委員会の承諾、研究実施施設の倫理審査の承認を得た。

研究者は調査までの2年間、同施設で対象者と生活の一部を共にすることや年4、5回の性教育を担当してきた。子どもに研究参加への同意を得る手続きとして、通常の性教育の終わりに研究協力者を募集するお知らせを行った。本人からの申し出があり、子どもと施設長双方より同意が得られた場合にのみ対象者とした。研究対象者には研究への参加は自由意思であり、参加しないことで不利益を被ることはなく、途中辞退しても他の子どもと同様に対応されることや個人情報の保護、データの守

秘義務について、協力依頼文書・同意書および口頭で説明した。研究者は、子どもの表情や仕草などを観察したり、子どもに尋ねたりすることで心身への影響に常に配慮した。また、子どもに答えたくないことに答えずとも良いことを伝え、誘導的にならないよう慎重に面接を進めた。

V. 結 果

1. 対象者の背景

児童養護施設に入所している小6（12歳）～中3（15歳）の10名の思春期女子。入所時の年齢は6歳～14歳。入所の理由は、全員が虐待を受けた体験をもっていた。学校は普通級に通う子ども9名と、特別支援学級に通う子どもが1名いた。初経を迎えている子どもが7名、迎えていない子どもが3名いた。1組姉妹がいた。

今回、研究対象者に特別支援学級に通う子どもが1名いるが、以下に示す認識と対処については、他の子どもと大きな差がないと考え、同様に分析した。

2. 思春期女子の心身の変化に対する認識と疑問への対処

小学生3名は初経を迎えていない状況であり、初経を迎えている中学生7名とは初経や月経を含めた性に関する認識が大きく異なった。そのため、2つのグループを分けて表に示す。対象者へのインタビュー内容を分析した結果、児童養護施設に入所している思春期女子の心身の変化に対する認識とその変化に対する疑問への対処は、中学生（表1）は12カテゴリーと56サブカテゴリー、小学生（表2）は、8カテゴリー、19サブカテゴリーが抽出された。項目毎に、カテゴリーを《 》、サブカテゴリーを〈 〉で、具体的内容を「 」示す。

表1 児童養護施設に入所している思春期女子の心身の変化に対する認識と、その変化に対する疑問への対処（中学生）

カテゴリー	サブカテゴリー
初経を迎えた時の認識	学校か施設で初経を迎えたことを覚えている
	腹痛や下着に付着した経血で初経に気づいた
	冷静な自己に気づいた
	驚きと困難を感じた
	授業で学んだ知識を忘れてしまった
初経を迎えた時の対処	家族、保育士、施設の友人に相談した
	家族や保育士に相談しなかった
	生理用品（友人、保健室、施設の日用品、学校からの支給）を調達できた
現在の月経に対する認識	月経の時期を把握している
	下着の経血の汚染や感覚で月経に気づく
	月経時（前）の月経への嫌悪やイライラを感じる
	月経前に限らない（常時）イライラを感じる
	月経時（前）にイライラした感じがない
	月経時に眠気を感じる
	月経痛を感じる
	月経痛を感じていない
	月経は出産する準備となる
	月経が始まると身長が伸びない

カテゴリー	サブカテゴリー
現在の月経に対する対処	月経時、保育士に知られないようにする
	カレンダー、手帳に月経の記録をつけている
	痛みに対処する（薬を飲む、我慢する、体育を休む）
	月経時（前）にイライラする時は横になる
	月経時は3回くらいトイレに行くようにする
性や成長に対する認識	生理用品は施設に準備されたものを使う
	胸は小さい方がいいし、下着もつけたくない
	身長が伸び、男子に嫌われるか気になる
	今は、知りたいことがない
	父親に似て、自分を素敵だと思えない
性や成長に対する対処	自分をデブで嫌いだと思う
	情緒不安定や怒りやすくなることもある
	部活の人間関係でストレスを感じても相談できる人がいない
性に関する情報に対する認識	ストレスを解消する（足の皮をむく、ボクシングをする）
	下着は保育士と一緒に買いに行く
性に関する情報に対する対処	小・中学校の授業（保健体育）や養護教諭から教わった
	学校で性教育を受けたか不明
性に関する情報に対する認識	友人（男女）や家族（父親、姉）との話しや大人の漫画から知ることになった
	性に関する漫画は見ない
異性に対する認識	好きな異性を意識する
	彼がほしい
	異性をあまり意識しない
	異性が苦手で嫌悪を感じる
	人（異性も）との関わり方について知りたい
異性を意識したときの対処	異性と交際した経験がある
	好きな異性に、自分から接近する（話しかける、電話する）
	異性に気持ちを伝えない
現在の人との付き合い方や好きなことに対する認識	学校や施設に友人がいる
	友人との距離感に悩んでいる
	人間観察するがなるべくポジティブに捉える
	厳しいけど優しいお母さんみたいな人が好き
	一人で寝ることに戸惑いがあった
	親と繋がらず、1人だから誰かと繋がれる姉妹や双子が羨ましい
	友人との会話、遊び、部活、テレビや音楽鑑賞、ピアノを弾くこと、絵を描くことが楽しみ
	施設や学校で楽しめることがない
	施設での生活に対し、ポジティブな気持ちとネガティブな気持ちの両方がある
現在の人との付き合い方や好きなことに対する対処	学校や施設であまり他の子どもと関わらない
	頑張っていることがある（部活、学校を休まない、地域の行事）

表2 児童養護施設に入所している思春期女子の心身の変化に対する認識と、その変化に対する疑問への対処（小学生）

カテゴリー	サブカテゴリー
初経、月経に対する認識	初経・月経について学んだ（保育士、施設の性教育、学校）
	月経について知っている（経血が出る、痛みがある、イライラする）
	月経は面倒だと思う
初経、月経の対処に対する認識	月経になる理由を知っている
	初経を迎える時に相談する人を知っている（施設：保育士、学校：養護教諭）
性や成長に対する認識	初経・月経期間中に、しない方が良いことを知っている
	生理用品について知っている（生理用ショーツ、ナプキン）
性に関する情報に対する認識	今は知りたいことがわからない
	性教育の学習の中で気にいったところがある
異性に対する認識	大人になると、好きなことができる
	学校や施設で性教育について学んだ
異性に対する対処	異性を意識することはない
	仲の良い異性がいる
現在の人との付き合い方や好きなことに対する認識	施設では仲の良い異性はいない
	異性と一緒に遊ぶことがある
現在の人との付き合い方や好きなことに対する認識	施設・学校で仲の良い友人がいる
	施設では皆が信じられない
現在の人との付き合い方や好きなことに対する対処	好きなことがある（パソコン検索、音楽鑑賞、2重跳び、漫画を読む、テレビ鑑賞、ダンス、鬼ごっこ）
	頑張っていることがある（早寝早起き、逆上がりや後転、部活、片付け）

1) 中学生の心身の変化に対する認識とその変化に対する疑問への対処

中学生の《初経を迎えた時の認識》では、〈学校か施設で初経を迎えたことを覚えている〉ことや〈腹痛や下着に付着した経血で初経に気づいた〉ことに対し、〈冷静な自己に気づいた〉、〈驚きと困難を感じた〉、〈授業で学んだ知識を忘れてしまった〉と突然の出来事に戸惑う様子や教わったことを覚えていない児もいた。また、《初経を迎えた時の対処》では、〈家族、保育士、施設の友人に相談した〉児や〈家族や保育士に相談しなかった〉児もいた。7名中5名の子どもは、家族や保育士に相談し、施設の年上の女子を頼る児もいた。「初経を迎えて嫌だという気持ちを保育士に話した」児がいた。一方で、戸惑いの気持ちを持ちながらも「誰にも相談できなかった」児や「保育士に話すようなことではないと思う、話さなかった」児がいた。〈生理用品（友人、保健室、施設の日用品、学校からの支給）を調達できた〉ことから、多くの子どもが施設に準備されたものや学校での配布、友人や保健室を頼り、生理用品を調達し対処していた。

《現在の月経に対する認識》では、〈月経の時期を把握している〉ことで月経の時期を予測し、心構えのある児と〈下着の経血の汚染や、感覚で月経に気づく〉のように感覚的に捉えている場合や毎回、下着の汚染があるまで気がつかない児がいた。精神的な面では、〈月経時（前）にイライラした感じがしない〉と特に変化の感じられない児や〈月経時（前）に月経への嫌悪やイライラを感じる〉と月経に伴う変調を強く感じる児がいた。中には、〈月経前に限らない（常時）イライラを感じる〉と月経に限らず、普段からイライラした状態が継続していることを認識していた。月経痛は、〈月経痛を感じる〉児と〈月経痛を感じていない〉児がいた。その他にも、〈月経時に眠気を感じる〉と認識し、〈月経は出産する準備となる〉ことや〈月経が始まると身長が伸びない〉ことを気にする児もいた。《現在の月経に対する対処》では、〈月経時、保育士に知られないようにする〉ことで、大人に隠れるように対処する児がいた。〈カレンダー、手帳に月経の記録をつけている〉ことで、自分の月経を管理する児もいた。一方で多くの児は、記録をつけず、自分の月経について把握できていなかった。月経に伴う痛みやイライラに対し、〈月経痛に対処する（薬を飲む、我慢する、体育を休む）〉ことや〈月経時（前）にイライラする時は横になる〉ことで対処していた。また、〈生理用品は施設に準備されたものを使う〉ことや〈月経時は3回くらいトイレに行くようにする〉ことで下着

の汚染を防いでいた。

《性や成長に対する認識》では、急な身体的変化に気づき〈身長が伸び、男子に嫌われるか気になる〉ことや周囲と比較し〈自分をデブで嫌いだと思う〉こと、〈肌荒れしやすく、頭皮湿疹ができる〉ことで、周囲からの見られ方を気にした。中には、〈胸は小さい方がいいし、下着もつけたくない〉と女性としての身体の変化を受容できない気持ちを表現する児もいた。親との関係から、〈父親に似て、自分を素敵だと思えない〉と自分を否定的に捉える様子もあった。精神的な面では、〈情緒不安定や怒りやすくなることがある〉と自分の感情を調整し難いことや〈部活の人間関係でストレスを感じても相談できる人がいない〉と何とかしたいが、人を頼れないもどかしさを表現した。〈今は、知りたいことがない〉と性への関心の薄い様子もあった。《性や成長に対する対処》では、幾つかの方法で〈ストレスを解消する（足の皮をむく、ボクシングをする）〉対処をしていた。成長とともに必要になる〈下着は保育士と一緒に買いに行く〉ことで対処していた。

《性に関する情報に対する認識》では、〈学校で性教育を受けたか不明〉な児もいたが、〈小・中学校の授業（保健体育）や養護教諭から教わった〉ことを記憶しており、多くの子どもは、小学校や中学校の保健体育の授業、保健室に行った時に養護教諭から男女の身体の違い、月経、射精等の知識を持っていた。しかし、中には〈友人（男女）や家族（父親、姉）との話しや大人の漫画から知るようになった〉という周囲の人や環境の影響を強く受ける様子が窺えた。また、〈性に関する漫画は見ない〉対処をとっていた。

《異性に対する認識》では、半数以上の児が〈好きな異性を意識する〉ことや〈彼がほしい〉気持ちを表現し、具体的に〈人（異性も）との関わり方について知りたい〉と要望を示した。中には、〈異性をあまり意識しない〉ことや〈異性が苦手で嫌悪を感じる〉児もいた。《異性を意識したときの対処》では、〈異性とお付き合いしたことがある〉ことや〈好きな異性に、自分から接近する（話しかける、電話する）〉ことから、異性に対し積極的な態度を見せる児がいた。一方で、〈異性に気持ちを伝えない〉と思いを抱える様子もあった。

《現在の人との付き合い方や好きなことに対する認識》では、〈学校や施設に友人がいる〉ことや〈友人との距離感到悩んでいる〉こと、〈人間観察するがなるべくポジティブに捉える〉ことから、人との関係に悩むが前向きに捉えようとする側面もあった。また、〈厳しいけど優しいお母さんみたいな人が好き〉と母について語り、

家族と離れ〈一人で寝ることに戸惑いがあった〉ことや〈親と繋がれず、1人だから誰かと繋がれる姉妹や双子が羨ましい〉と家族と離れた寂しさや親との関係が複雑できょうだいいない孤独を表現した。楽しみは、〈友人との会話、遊び、部活、テレビや音楽鑑賞、ピアノを弾くこと、絵を描くことが楽しみ〉とする一方で、〈施設や学校で楽しめることがない〉ことや〈施設での生活に対し、ポジティブな気持ちとネガティブな気持ちの両方がある〉と葛藤する気持ちを表現した。《現在の人との付き合い方や好きなことに対する対処》では、〈学校や施設であまり他の子どもと関わらない〉ことで対処する様子や〈頑張っていることがある（部活、学校を休まない、地域の行事）〉と自分なりに目標をもち、対処していた。

2) 小学生の心身の変化に対する認識とその変化に対する疑問への対処

《初経、月経に対する認識》では、〈初経・月経について学んだ（保育士、施設の性教育、学校）〉ことから、〈月経についてわかる（経血が出る、痛みがある、イライラする）〉こと、〈月経になる理由がわかる〉とあり、〈月経は面倒だと思う〉気持ちを表現した。

《初経、月経の対処に対する認識》では、〈初経を迎える時に相談する人を知っている〉ことから、頼れる存在をイメージできていた。また、〈初経・月経期間中に、しない方がよいことを知っている〉ことや〈生理用品について知っている〉ことを認識していた。

《性や成長に対する認識》では、〈今は知りたいことがわからない〉一方で、〈性教育の学習の中で気に入ったところがある〉と認識していた。また、〈大人になると、好きなことができる〉という認識も持っていた。

《性に関する情報に対する認識》では、〈学校や施設で性教育について学んだ〉ことを記憶し、「施設の性教育で初めて性についての話を聞いた」児がいた。「学校の（スキー）合宿の前に性教育を受けた」児もいた。

《異性に対する認識》では、〈異性を意識することはない〉が、〈仲の良い異性がいる〉ことや〈施設では仲の良い異性はいない〉とも認識していた。《異性に対する対処》では、「自分から軽い感じで男子を誘って遊べる」児や「相手から誘われて遊ぶ」児もいた。

《現在の人との付き合い方や好きなことに対する認識》では、〈施設・学校で仲の良い友人がいる〉、一方で、〈施設では皆が信じられない〉という気持ちを表現した。また、〈好きなことがある（パソコン検索、音楽鑑賞、2重跳び、漫画を読む、テレビ鑑賞、ダンス、鬼ごっこ）〉ことも表現した。《現在の人との付き合い方や好き

なことに対する対処》では、「早寝早起きがんばっている」、「逆上がりや後転ができるようになった」のように、部活、片付け等、その児なりの課題に取り組んでいた。

VI. 考 察

1. 児童養護施設に入所している思春期女子の心身の変化に対する認識とその変化に対する疑問への対処の特徴、及び関連する要因

1) 二次性徴、月経周期、被虐待体験からの情緒の不安定さ

中学生女子は《現在の月経に関する認識》の中で、月経時（前）の月経への嫌悪やイライラを感じる〉ことや、〈月経前に限らない（常時）イライラを感じる〉とあり、イライラの継続する様子があった。さらに、《性や成長に対する認識》の中でも、〈情緒不安定や怒りやすくなることもある〉ことから、何らかの情緒の不安定さを感じていた。思春期の子どもは、二次性徴のホルモンや脳内物質の変化により、精神的に不安定になりやすい⁹⁾。加えて、施設に入所する子どもは、親に甘え依存する時期に、十分に甘えられた体験が少ない子どもも多い。親に満足に世話をされない等の虐待を受けた子どもは、安心感が乏しく、記憶や感情を調整する海馬や扁桃体の委縮等の脳の発達への影響からストレスへの脆弱性が指摘される^{12), 13)}。また、些細な刺激で激しい怒りを持ちやすく、自己での情緒的に安定した状態への回復が難しいとも言われる⁷⁾。本研究の子どものイライラも、二次性徴、月経周期に伴うものも考えられるが、常に情緒不安定な様子があり、被虐待の影響からのストレス耐性の低さによる影響が考えられる。怒りの理由がその状況にそぐわない場合は、フラッシュバックなど、過去の記憶の影響も考え、心的外傷後ストレス障害（PTSD）の治療²³⁾も必要となることが考えられる。

このような子どもと関わる際には、子どもが自己の身体的な変化としての月経周期を把握でき、それに伴う精神的な変化にも目を向けコントロールできるよう性教育等で支援することが必要と考える。また、子どもの精神的な変化を観察し、時には受診に繋げる等、その子に合った支援方法を医療職も交えて検討することが必要と考える。

2) 大人になることへの不安と抵抗

中学生女子は、《性や成長に対する認識・対処》の中で、〈胸は小さい方がいいし、下着もつけたくない〉ことや〈父親に似て、自分を素敵だと思えない〉とあり、標準的な体型だが、周囲と比較し〈自分をデブで嫌いだと思う〉こともあった。この時期の女子の特徴として、二次性徴の発現と共に外見への関心が強まる傾向¹⁴⁾や

大人になることへの不安と抵抗が言われる⁵⁾。本研究の子どもも、二次性徴に伴う急激な身体の変化に不安と抵抗を感じ、自分の外見に自信が持てず、周囲の評価に必要以上の敏感さをもつと考えられる。また、虐待を受けた背景から、母親と同じ大人の女性への成長や父親似的自分を拒否する気持ちも窺える。今後、子どものボディイメージがひどく歪むようなことになれば、精神的な病に発展する可能性も推測される。子ども本人の自己の捉え方や食事・服装等に関する言動・行動に注目し、子どもが感じていることへの理由を確認しながら支援する。場合により、児童精神科等へつなぐ支援も必要である。また関わりの中で、子どもが言語的に気持ちを表出することを否定せずに受けとめる姿勢も、気持ちを抑圧させず、大人との信頼関係を築き、支援を受け入れてもらう重要な関わりと考える。

3) 人との付き合いの難しさ

中学生女子は、初経を迎えた時の対処について〈家族、保育士、ホームの友人に相談した〉とあった。甲斐村¹⁵⁾の調査では、初経の発来を最初に告げたのは「母親」が全体の8割との報告がある。梅村、杉浦¹⁶⁾の調査でも、中学2、3年生を対象に月経について相談できる人の有無を尋ね、「いる」と答えた子どもの約9割が「母親」と回答した。中学生の子どもは、本来、家庭という家族に囲まれた環境で生活するのが一般的である。家族と生活をし、母親が存在すれば、初経を迎える時・月経に関して殆どの子どもは「母親」に相談することが自然と言える。一方、施設という環境に置かれる子どもは、日常生活で親を頼ることが難しい現状がある。そのため、母親代わりに養育を行う女性保育士に初経・月経の相談をすると考えられる。しかし、中には〈家族や保育士に相談しなかった〉や〈月経時、保育士に知られないようにする〉とあった。さらに、月経以外の相談についても〈部活の人間関係でストレスを感じても相談できる人がいない〉とあり、家族や施設の保育士等、大人への相談を避ける様子も窺える。

また、友人との関わりは、中学生女子の殆どの児が〈学校や施設に友人がいる〉と認識していた。しかし一方では、〈友人との距離感到悩んでいる〉中で、「信じていいか。話して良いか考える」児や「距離が近いと気持ち悪い」という児がいた。さらに、〈人間観察するがなるべくポジティブに捉える〉とあった。小学生女子でも、〈施設・学校で仲の良い友人がいる〉一方で、〈施設では皆が信じられない〉とあり、中学生と同様に友人との付き合い方に悩んでいた。友人関係の発達理論としてSullivanは、前思春期（8歳半以降）における同性の親

友の存在の重要性を指摘する¹⁷⁾。そして、特定の人ひとりに対する親密欲求からの親友の関係を通じた他者とわかりあえる体験を述べている¹⁷⁾。本研究の児もSullivanの言う特定の友人との関わりを求め、わかりあえる体験を得たいとする反面、相手を信じきれない気持ちを表現している。前述した施設の保育士など、大人との関わりについても同様だが、このような感情は、John Bowlbyが述べる子どもの2、3歳までのアタッチメント・パターンの発達¹⁸⁾に影響を受けていると考える。虐待を体験して成長した子どもは、幼い時期に人との安心できる機会よりも、不快で傷つけられる体験を味わうことが多く、強い不安感や他者への不信感をもつ傾向が指摘される^{19)、20)}。本研究の子どもも幼少時の親子関係が、現在の保育士や友人のような身近な他者との関わりに影響している可能性が示唆される。

中学生女子の中には、自分の感情の不安定さを自覚し、〈学校や施設であまり他の子どもと関わらない〉ことで人との摩擦を避ける対処行動をとる様子があった。自分の感情に目を向け人との摩擦を避けることも、関係を維持するために時には有効である。しかし、常時、人との関わりを避けることになると孤立し、健康的な発達の経過から外れていく可能性が示唆される。他にも、〈施設や学校で楽しめることがない〉とあり、一時的なものか長期間に亘るものか、子ども一人ひとりの人とのつきあいの様子を学校や施設が連携して見ていくことが必要である。

異性との関わりには、思春期によく見られる異性への関心の高まりが²¹⁾、本研究の中学生女子にもあり、〈好きな異性を意識する〉と身近な異性や俳優に対し、憧れの気持ちを持っていた。対処として、好きな男子に「話しかけ、手をにぎる」、「自分から話しかける」、「きっかけをつくる」と語り、積極的に関わる様子も窺えた。〈異性と交際したことがある〉児も、〈異性が苦手で嫌悪を感じる〉児も、「異性との関わり方の距離感がつかめない」ために〈人（異性も）との関わり方について知りたい〉という願望を持っていた。前者は、異性を意識し実際につきあう中で、異性だけでなく人との関係について悩み、模索していると考えられる。後者は、異性に嫌悪を感じる一方で〈彼がほしい〉と異性も求める思いもあり、思春期の子どもに見られるアンビバレントな感情を抱いている²²⁾と言える。中には、異性からの性的な虐待を受けた疑いのある児もあり、大人の異性への嫌悪感が強い場合には虐待の影響も考えられる。また、異性と関わる距離などは、子どもの認識だけでなく関わる職員からの客観的な捉え方も合わせて見ていく必要がある。

以上のように、施設に入所している子どもは、人とのつきあいに難しさを抱えることが考えられ、特に身近な人との関係にも不信感をもつ様子が窺える。そのような子どもが自分の身に危険を感じた時に信頼できる大人に相談できるよう日々の丁寧な関わりが必要である。また、学校と施設が連携し、子どもの様子を共有して支援することの必要性も示唆される。

4) 環境を受け入れる力

中学生女子は《現在の人との付き合い方や好きなことに対する認識》の中で、〈頑張っていることがある（部活、学校を休まない、地域の行事）〉、小学生女子は〈頑張っていることがある（早寝早起き、逆上がりや後転、部活、片付け）〉とあり、小学生、中学生女子とも、それぞれが部活や学校を休まない、早寝早起き等の自己の課題や地域貢献に挑戦していた。中学生女子は、〈施設での生活に対し、ポジティブな気持ちとネガティブな気持ちの両方がある〉とあった。その中に、「施設の子と見られるのがいや」、「来なくて施設に入ったわけじゃない」と周囲からの評価を意識する言葉や不本意な環境に置かれることへ反発する言葉も聞かれ、思春期の子どもの自己意識や恥意識⁴⁾からの発言と考えられた。他にも、施設や保育士に対して「施設出身ではないので施設に入る子どもの気持ちはあまりわからないと思う」と一時的に批判的な見方をする面もあった。しかし、施設での様々な制約の中で「自由が欲しいけど、自由すぎるのもどうか」、「それなりに特権（食事の内容、野球観戦が無料など特別な招待）があり、恵まれている」と先の発言のように環境を嘆く一方で、客観的に物事を捉え、自分が保護され優遇を受けている状況にも目を向けることができている。施設に入所している子どもは、親との喪失体験を抱え、自分では望まない環境に置かれることが多い。しかし、そのような状況の中でも、置かれた環境に適応し、受け入れる力をもつ側面も持ち合わせる子どももいると考える。

2. 児童養護施設に入所している思春期女子への支援と今後の課題

施設で暮らす子どもは、虐待体験の影響からの自尊心の低さや知的能力の問題、社会経験の少なさを抱えながら二次性徴を迎える。家庭で育つ子どもでもあるように、体型の変化や月経の開始、月経周期による気分の変動、異性への関心をもつようになる。本研究の子どもも、大人の女性になることへの不安と抵抗や人との付き合いの難しさをもち、情緒の不安定さを持っていた。しかし、その一方で、環境を受け入れる力も持ち合わせていた。

このような特徴をもつ思春期女子への支援を考えると、子どもの生活に関わる保育士・児童指導員・心理士等と共に、学校の養護教諭や担任の教員も必要な情報を共有し、1つのチームとして子どもを支援する必要性が考えられる。そのチームの中で、看護職は子どもの心身の変化への科学的な知識や対応する技術を持つ専門職である。現在看護職は、一部の施設にのみ配置されている状況であるが、学校の養護教諭だけでなく、施設の中にも必ず存在し、施設職員と連携し、前述した子どもの特徴に配慮した性（生）に関する支援を行う必要があると考える。

今回、児童養護施設に入所している思春期女子の心身の変化に対する認識とその変化に対する疑問への対処、及び関連する要因を明らかにすることを目的に思春期女子を対象にインタビュー調査を行った。研究者は、対象者への調査に至るまでの2年間の関わりの中で関係作りをしてきた。そのため、聞くことのできた部分と、子どもの立場からは話しにくい部分もあったと考えられる。思春期では対象により、全てを語る年齢ではないことや語ることと思いや行動が伴わないことも推測される。このことから、本研究の結果の一般化には限界がある。また、今回子どもの認識という一側面から考察した。しかし、子どもへの支援を考える場合、日々、生活を共にしながら子どもを支援する施設職員の方々の視点も必要である。

最後に、子どもは環境を受け入れる力を持っていた。その子どものもつ力を発揮できる要因についても明らかにし、支援に生かせるよう取り組むことも今後の課題の一つと考える。

VII. 結 論

1. 児童養護施設に入所している思春期女子の心身の変化に対する認識とその変化に対する疑問への対処の特徴は、二次性徴、月経周期、被虐待体験からの情緒の不安定さ、大人になることへの不安と抵抗があること、人との付き合いの難しさ（大人への関わり、友人関係、異性関係）をもつ一方で、環境を受け入れる力も持ち合わせていた。
2. 児童養護施設に入所している思春期女子への支援として、子どもの心身の変化への科学的な知識や対応する技術を持つ看護職は、学校の養護教諭だけでなく、施設の中にも必ず存在し、施設職員と連携し、前述した子どもの特徴に配慮した性（生）に関する支援を行う必要があると考える。

謝 辞

本研究において貴重な体験をお話下さいました思春期女子の皆様、心より深く御礼申し上げます。また、ご尽力頂きました児童養護施設の皆様、ご指導頂きました中村伸枝先生、佐藤奈保先生に感謝致します。なお、本研究は千葉大学大学院看護学研究科に提出した修士論文の一部を加筆・修正しており、本研究の一部は第60回小児保健協会学術集会にて発表したものである。

利益相反に関する開示事項はありません。

引用文献

- 1) 厚生労働省. 社会的養護の課題と将来増の実現に向けて. (平成28年7月版：平成28年8月16日閲覧)
<http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000108940.pdf>
- 2) 厚生労働省. 社会的養護の現状について. (平成28年7月版：平成28年8月16日閲覧)
<http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000108941.pdf>
- 3) 鈴木幸雄, 佐藤秀紀, 秋元洋志, 金 潔, 木下茂幸：児童養護施設における児童の問題行動と保護者の抱える問題に関する実証的研究, 北海道医療大学看護福祉学部紀要, 59-76, 2002.
- 4) 石 曉玲：児童養護施設における子どもの情緒的・行動的問題アセスメント, 臨床教育心理学研究, 32(1)：1-8, 2006.
- 5) 増沢 高：虐待を受けた子どもの回復と育ちを支える支援, 第1版, 福村出版, 38-155, 2009.
- 6) 坪井裕子, 李明憲：虐待を受けた子どもの自己評価と他者評価による行動と情緒の問題, 教育心理学研究, 55：335-346, 2007.
- 7) 西澤 哲：子ども虐待, 第3版, 講談社現代新書, 133-159, 2012.
- 8) ヘネシー・澄子：子を愛せない母 母を拒否する子, 第1版, 学習研究社, 32-52, 2004.
- 9) 奥山真紀子：子どもの育ちと性一性への関心の発達と思春期の性の発達一, 児童養護, 37(2)：35-38, 2006.
- 10) 服部祥子：生涯人間発達論, 第2版, 医学書院, 92-107, 2010.
- 11) 齋藤益子, 井口一成, 高村寿子, 平岡友良, 村瀬幸浩, 木村好秀, 堀口雅子, 甲村弘子, 内山絢子, 榊原秀也：思春期における性教育のあり方, 思春期学, 27(4)：351-360, 2009.
- 12) 杉山登志郎：子ども虐待という第四の発達障害, 第1版, 学習研究社, 24-113, 2007.
- 13) 友田明美：児童虐待と傷ついていく脳, 第1版, 診断と治療社, 124-128, 2012.
- 14) 田川真理子, 宮崎麻里子, 池田明美, 野副佐代子, 吉開陽子, 喜多村幸代, 武田陽子, 新小田春美, 平田伸子, 野口ゆかり, 福重淳一郎, 関 文恭：二次性徴の発現に伴う性の悩みと親子関係, 母性衛生, 42(1)：34-42, 2009.
- 15) 甲斐村美智子：女子学生の月経の経験と自己肯定感, 日本女性心身医学会雑誌, 14(3)：77-284, 2010.
- 16) 梅村保代, 杉浦絹子：中学生の月経随伴症状と家庭における月経教育の実態, 母性衛生, 50(2)：275-283, 2009.
- 17) Harry Stack Sullivan, M.D (中井久夫, 宮崎隆吉, 高木敬三, 鐘幹八郎 訳)：精神医学は対人関係論である, みすず書房, 276-289, 2005.
- 18) John Bowlby, A Secure Base (二木武 監 訳)：母と子のアタッチメント 心の安全基地, 医師薬出版株式会社, 104-107, 2004.
- 19) 岡田尊司：母という病, 第3版, ポプラ社, 46-84, 2012.
- 20) 西澤 哲：虐待を受けた子どもの心理的特徴, 里親と子ども, 2：40-47, 2007.
- 21) 小椋芳子：生と性の日常性, 大阪健康福祉短期大学紀要, 5：79-86, 2007.
- 22) 川野雅資：セクシュアリティの看護, メヂカルフレンド社, 51-56, 2000.
- 23) 西澤 哲：虐待というトラウマ体験が子どもに及ぼす心理精神的影響, 北海道医療大学看護

CHANGES IN BODIES AND MINDS REPORTED BY ADOLESCENT GIRLS IN THE HOME FOR CHILDREN: THEIR CHARACTERISTICS AND COPING STRATEGIES TOWARD THESE CHANGES

Kayoko Yuyama
Josai International University

KEY WORDS :

Home for Children, Adolescent girls, lifestyle and sex education, Child Abuse

The purposes of this study were to identify whether adolescent girls admitted to the home for children recognized a variety of changes that were taking place in their bodies and minds during their adolescence, why these changes were happening to them, and in what ways they were coping with these changes. Subjects consisted of ten adolescent girls, age 12 to 15 years (from the grade 6th through the senior year of middle school). Semi-structured interviews with qualitative-inductive data analysis methods were used. The results of this study revealed following two major findings: 1. The characteristics of the adolescent girls' recognitions toward their changes in minds and bodies and their coping strategies toward these changes include secondary sex characteristics, menstrual periods, emotional instability resulted from experiences of being abused, feeling afraid of and resistive toward becoming adults, and experiencing difficulties with establishing relationships with others, i.e., relating to adults, friends, and males, while on the other hand, demonstrating abilities to adapt to environmental changes in general.

2. In order to assist the girls resident in the children's home, professional nurses equipped with scientific knowledge and expertise on the changing health needs of these residents must not only act as typical school nurses, but also be present with them in the facility on a day-to-day basis, coordinate carefully with facility staff, and support the girls in learning about their own sexuality (both biologically and in terms of lifestyle).